

『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳

二〇一六年五月二十八日（土）午後二時―四時 作成 清原章夫

今月の音楽

- 一・ベートーヴェン（独・一七七〇～一八二七年） 交響曲第九番ニ短調 『合唱』 第四楽章
- （二）演奏 ヴィルヘルム・フルトヴェングラー：指揮 バイロイト祝祭管弦楽団・同合唱団
エリーザベト・シュヴァルツコップ・ソプラノ エリーザベト・ヘンゲン：アルト
ハンス・ホップ・テノール オットー・エーデルマン：バス・バリトン
録音…一九五一年七月二十九日 バイロイト音楽祭再開記念演奏会のライブ録音
- （二）曲目解説 ロランは『ベートーヴェンの生涯』で、この交響曲について以下のように詳細に述べている。

「人が想像する以上にしばしば起こる悲しい事実であるが、この場合、伯父の大きい道義性は、甥に幸いせずかえってわざわいしたのである。それは甥を自棄的にさせ、ついには反抗心を起こさせるに到った。甥自身がいった次の恐るべき言葉には、この惨めな魂の真相があらわに示されている——「伯父が僕を善人にしようとしたために、僕はかえって悪人になった。」一八二六年の夏にカルルは自分の脳天へピストルの弾を撃ち込む事態にまで立ち到った。カルルはそれによって命を落とさずに済んだが、そのために致死的な打撃を受けたのはベートーヴェンであった。この恐ろしい激動から彼は再び立ち直ることができなかった。カルルは全快した。彼は生き延びて最後まで——ベートーヴェンの死ぬ日まで——彼を悩ましつづけた。そしてベートーヴェンの死の原因に対しても決して無縁とはいえないこの男は、ベートーヴェンの臨終のときにもその側にいなかった。——「神はこれまでわしを見棄て給わなかったのだから」とベートーヴェンは、死に先だつ数年前に甥に宛てて書いた「わしが死ぬときにも、わしの臉を閉じてくれる人間が誰か一人はいてくれるだろう。」——この誰か一人の人間は、彼が「自分の息子」と呼び慣れたその者ではついに無かったのである。

ベートーヴェンが歓喜を頌めようと企てたのは、こんな悲しみの淵の底からである。

それは彼の全生涯のもくろみであった。まだボンにいた一七九三年からすでにそれを考えていた。生涯を通じて彼は歓喜を歌おうと望んでいた。そしてそれを自分の大きい作品の一つを飾る冠にしようと望んだ。生涯を通じて彼は頌歌の正確な形式と、頌歌に正しい場所を与える作品とを見いだそうとして考えあぐねた。『第九交響曲』を作ったときさえも、究極の決定を与えかねて「歓喜への頌歌」は、これを第十か第十一の交響曲の中へ置き換えようという気持ちを、最後の決意の瞬間まで持ちつづけていた。われわれは、『第九』が世に普通呼ばれるごとく『合唱を伴える交響曲』と題されていることをよく注目しなければならない。どうかすると、この交響曲はまったく別の終曲を持つようになったのかも知れなかった。なぜなら、一八二三年の七月にはまだベートーヴェンは、この作品に器楽だけの終曲を与えるつもりだったのである。そのために考えていた主題はその後作品第三百三十二番の弦楽四重奏の中へ転用せられた。一八二四年五月の『第九』演奏の後でさえも（ツェルニーとゾンライトナーの説によると）ベーター

ヴェンは終曲の作りかえの意図を全部的には抛棄していなかったという。

交響曲へ合唱を入れるということには幾多の技術上の大きい困難があった。ベートーヴェンの手記や、また、いろいろな試作——すなわち人間の歌声をこの作の現在入れられてある箇所とはたぶん別な箇所へ、別なやり方で入れるつもりで、あれこれとやって見たいろいろな試作が、これらの大きい困難をわれわれに確証している。『第九』の緩徐調の第二の主題のための草案の中に「おそらく合唱をここに用いたら歓喜がいつそう美しいだろう」と記してある。しかも彼は彼に対して忠実なオーケストラを見限る決心がつかないのであった。彼はいつている——「一つの楽想が心に来るとき、私には常にそれが器楽の音で聴こえる。けっして歌声によつてではない。」彼はまた、人間の歌声をつかう瞬間をできるかぎり先へ延引していた。初めのうちは終曲の宣叙調（レクタティブ）のみか「歓喜」の主題そのものをさえ器楽とすることに決めていた。

けれどもこの不決断と延引との理由をさらに詳細に理解してみることが緊要である——その原因はいっそう深いところにあるのだから。絶えず憂苦に心を噛まれていたこの不幸な人間は、またつねに「歓喜」の靈妙さを頌めたいと欣求した。そして歳から歳へ、その課題をくりかえし採り上げては、またしても、情熱の旋風と憂愁との囚になるのであった。生涯の最後に到つて初めてこの目的を達成することができた。しかも何たる偉大さをもつて彼はそれを達成したのか！

歓喜の主題が始めて現われようとする瞬間に、オーケストラは突如中止する。急な沈黙が来る。歓喜の歌の登場へ、この沈黙が一つの不思議な神々しい性格を与える。実際、この主題は一個の神ともいえるのである。超自然的な静けさをもつてひろがりながら、歓喜は空から降りて来る。その軽やかな息のそよぎで、歓喜は悩みを愛撫する。苦悩から力を恢復して立ち上がる心の中へ喜びが迂り入るときに、それが与える第一の感銘は情愛の深さである。——「その優しい眼を見つめてみると泣けて来る」とベートーヴェンの友が彼についていつた感情を今ここにわれわれも感じさせられる。その音楽の主題がやがて声楽となつて現われると、まずそれは、非常にまじめな、そしてやや抑制された特質を持つ低音で示される。しかし、少しずつ歓喜は全体を手に入れる。それは一つの征服である。悲哀に抗する戦である。さてここに行進のリズムが来る。進軍する軍勢である。テノールの熱烈な喘ぐような歌。それはわれわれがベートーヴェン自身の息の音を聴いているかと思うよううち顫える部分である。——それは嵐の中を駆けめぐる老いたるリア王のように、デーモンの心熱に憑かれながら野の中を作曲しながら駆けめぐるときの彼の呼吸と、靈感された叫びとのリズムである。戦士的な歓喜ののちに、宗教的恍惚感がやってくる。それから聖なる大祝祭、愛の有頂天。全人類が腕を天へ差し出して強い歓声を挙げて、歓喜に向かって飛びかかり、胸の上にそれを抱きしめる。」「『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳 岩波文庫五十六〜五十九頁）

ロランは、この交響曲の初演の様子も記述している。

〇二二年のちの一八二四年五月七日に、『第九交響曲』すなわち『合唱を伴える交響曲』を指揮したとき（むしろ、その時のプログラムに書いてある言葉によれば「演奏の方針に参与した」とき）彼に喝采を浴びせた会場全体の雷鳴のようななどどろきが、彼には少しも聴こえなかった。歌唱者の女の一人が彼の手を取つて聴衆の方へ彼を向けさせたときまで、彼はまったくそのことを感づきさえしなかった。突然彼は、帽子を振り拍手しながら座席から立ち上がっている聴衆を眼の前に見たのだった。」「『ベートーヴェンの生涯』片山敏彦訳 岩波文庫五十一頁）